

3回目の春の様子

■ 蒲生干潟の現状

震災から3回目の春を迎えた。1年前に導流堤が再建された後は、目に見えて大きな環境の変化が起こることはなく、安定した環境の1年であった。ただし「安定した環境」とは、震災前の環境ではなく、震災から1年たった状況の環境が続いているということである。現在は、「ヨシが生えていない蒲生干潟」という姿で安定している。

■ 春の生物

水中での生物の活動はまだ鈍いが、藻の中を手網で探ると、ユビナガスジエビやエビジャコ仲間、ケフサイソガニ、チチブなど多くの生物が生息していた。(Fig.1) 昨年まで観察できなかったギンポの稚魚も採集できた。(Fig.2)

ハゼの仲間のピリンゴは繁殖期に婚姻色を示す。ピリンゴの雌は、尾びれを除いたひれが婚姻色で黒くなるが、採集した個体ははっきりとした婚姻色を示していた。(Fig.3)今の蒲生干潟の環境は、水質や栄養状態などがピリンゴの繁殖に問題がないのであろう。



Fig.1 藻の中の生物



Fig.2 ギンポ



Fig.3 婚姻色を示すピリンゴ

■ イシガレイの稚魚

イシガレイは毎年春に干潟内に侵入・成長し夏頃に外海へと移動していた。震災後もイシガレイは順調に成長する様子を見せていたが、今年の春もイシガレイの稚魚を観察することができた。Fig. 4は最も小さかった個体であるが、2～5cmの個体8匹を観察することができた。今年度もイシガレイの稚魚がしっかりと成長できる環境であることを切に願うものである。



Fig.4 イシガレイ稚魚

(佐藤 賢治)